

空



2013・10

SORA 51号

鳥渡る

柴田 佐知子

鶏をすこし走らす桐一葉

秋うらら權引き上げて湖の上

色鳥の攪む枝ごと揺れてをり

見廻りし稲田をまたも振り返る

鳴き声に勝る羽音や稲雀

美しき干菓子の箱に種を採る

身にしむや一世一首の相聞歌

豊年や漆器は両手もて運ぶ

秋彼岸老いては声をはばからず

裏山に猿がうろつく濁り酒

鴨や土蔵を覆ふ椿の木

払ふ気の失せるほど付くゐのこづち

何もせぬことにも疲れ夕月夜

猪の皮をやるぞと言はれても

秋風や潮にいたみし神の鈴

十字架を掲ぐる島や鳥渡る

殉教の色に出でたる曼珠沙華

草の穂や耕着てゐる漁休み

取上げし産婆はひとり浦まつり

島を飛び出して雀は蛤に

海峡のしぶきを浴びて椋鳥渡る

新涼 高倉和子

山叩く雨となりたる帰省かな

ゆつくりと母を座らせ涼新た

正座して新聞を読む終戦日

秋出水ぶつかり合ひて太りけり

用も無き道に出でたる九月かな

何となく見続けてゐる秋の瀧

父の声よく通る日や竹を伐る

雨音のやがて身叶に秋思とも

浮人形 中田みなみ

鰻より生れたやうな「う」の字かな

犬の耳持ち上げてやる溽暑かな

いく度も底を見て来し浮人形

辻々に水沸く町の星月夜

ご機嫌を伺ふやうな作り滝

花茗荷此処ぞここぞと咲いてをり

三十六歳没

晩年のなき母に剪る桔梗かな

かまつかや湖に日の落つ追悼碑

翼なき 服部 早苗

深淵 荒井千佐代

箒木や山門不幸の寺閑か

赤秀樹の洞や気根や大夕焼

弔ひの庭葉隠れの西瓜かな

遊船の銅鑼を打ちては折り返す

百年を岩の色して山椒魚

潮枯れの椰子の並木や避暑地去る

あかあかと夜を廻しけり絵灯籠

初期研修了へて短き髪洗ふ

「存外に」といふ口癖盆の月

秋立てり流木・藻屑・貝の殻

艶書かも国分尼寺の落し文

献花はや午後には萎れ原爆忌

翼なき身の重たさよ早空

身のうちに深淵のある秋真昼

裸子に一升瓶は重すぎで

通夜の灯をひとつも消さず秋あかつき

夏あざみ

柴田志津子

萋の花

だいじみどり

巢つばめとひとの軒借る通り雨

熱風や網屋立筋漁師町

舟を塗る夏草に朱をしたたらせ

寄せ書きの必勝祈願風灼くる

もの言へばやをら起つ牛夏あざみ

青芦や橋の向うの育児院

新盆や膝にこぼるる和三盆

夕波に打ちあげられし盆のもの

だぶたぶのズボンのあの子神楽舞ふ

少年の浄めの舞も里神楽

拍手は打たずじまひや放生会

連れだちてやさしき人よ放生会

あめかぜにふくらんでをるあきすだれ

子供らに追はれし蟬のなきじやくる

秋暑しはたと気付きし裏返し

咲きそろふ植ゑつばなしの萋の花

神鏡 野上 杏

神鏡に何も映らず敗戦日

小鳥来る寺の大きな案内板

ひとり来て夜の茅の輪をくぐりけり

夜更けまで人居こぼるる地藏盆

送り火や産土日々に遠くなり

耳たぶも鼻も祖母似の嬰の汗

それぞれに子は帰りけり洗鉢雨

蟬の昼影なき夫に話しかく



糸島 小林 朱 夏

鳴き止めば家に闇ありつくつくし

雲水の脚は休まず大花野

死を感ずる刻あり蓮の穴覗く

影長き客送り出す神無月

相聞の歌も混じれる葛嵐

粕屋 吉 田 葎

山笠や嬰の法被に少し水

救急車通して山笠の走りけり

甲冑の子がひきずられ秋祭

陰謀の照らされてゐる菊人形

樹は腕を伸ばし放題月の夜

熊本 松 田 明 子

息止めて意中の金魚掬ひけり

叶ひさうな願ひばかりや星祭

よろづ屋の日覆深く峡の町

つぶやきのごとく泡生む泉かな

生家とは疾うに無きもの盆の月

糸田 宮 井 知 英

立葵一途と云ふは色気なし

燭の穂の寄りて離れて盆の入

秋の川悟り切つたる顔をして

つくつくし一声鳴いてそれつきり

鶏小屋の奥の丸見え望の月

空作品抄
柴田佐知子抽出

用も無き道に出でたる九月かな

ご機嫌を伺ふやうな作り滝

裸子に一升瓶は重すぎて

遊船の銅鑼を打ちては折り返す

夕波に打ちあげられし盆のもの

咲きそろふ植ゑつばなしの萼の花

神鏡に何も映らず敗戦日

相聞の歌も混じれる嵐

樹は腕を伸ばし放題月の夜

息止めて意中の金魚掬ひけり

鶏小屋の奥の丸見え望の月

高倉 和子

中田みなみ

服部 早苗

荒井千佐代

柴田志津子

だいじみどり

野上 杏

小林 朱夏

吉田 菫

松田 明子

宮井 知英



大花火此の世彼の世へひらきけり

猫までも出払つてゐる秋の昼

明日征くと言ふ君と居し螢の夜

波音の夕べは近し盆の道

ところてん真顔といふは恐ろしき

死ぬること恐れぬ蛇を恐れても

天の川鯨を海に帰しけり

英雄は解体されて山笠果てぬ

げんげ田をつなぐ畦にも蓮華草

王宮に銃痕あまた蟬しぐれ

空蟬の眸のあり処ことに透く

泣きながら兄につきゆくとなほ捕り

馴染むまで頭の歪つなる籠枕

父母在りて限界集落雁渡し

ああでもないこうでもないといふ火蛾狂ふ

山内 碧

亀井 紀子

高倉恵美子

戸栗 末廣

田岡 千章

苑 実耶

山田 正子

栗原 京子

長 憲一

今井 春生

青木 朋子

野畑さゆり

樋口みのぶ

古川 夏子

原 友子

蚊のごとく一打で死せることもよし

命よりうまるるいのち天の川

鳩雀ばかり寄り来る敬老日

水都大阪商ひの水を打つ

忘れ物の札付いてゐるサングラス

士官涼し二人の時も歩を揃へ

撒水の蛇口しばらく熱き水

漂流の気分浮輪に目つむれば

目を強くのぞかれてより花カンナ

色付きの素麵ほどの誇りかな

面倒な事は見えざるサングラス

噴上げの夜は一枚の水となる

産声や窓いつばいの雲の峰

名を知らぬ親戚混じる盂蘭盆会

別るるも逢ふも涼しき眼を交はず

白 水 良子

織 田 高暢

矢 野 百合子

池 田 華甲

長 節 子

鳳 蛮 華

秋 千 晴

天 谷 翔 子

あ さ な が 捷

乾 有 杏

田 代 貞 枝

森 俊 人

林 徹 也

仲 里 奈 央

押 田 裕 見 子



敗戦日庭を畑にせしことも

秋めくや湖上に増ゆる漁舟

なめくぢり向き変ふるとき伸びにけり

蜘蛛の囀の裏側すでに暮れてをり

MRIの音に囚はれ日の盛り

まだ八十路夏富士制覇の夢を見て

満月や好きな言葉に朱線引く

打ち水に舞ひ戻りたる黒揚羽

終電の男の膝にバラの束

青空に組体操の崩れけり

白熊が空へ首のべ星月夜

白鷺の白を隠せぬ狭霧かな

見ゆるものすべて灼けたる此の世かな

全身で全霊で児の花火終ふ

月の渡御金の稚児武者従へて

小川 涼

石川 叔子

田邊 豊子

えとう 樹里

吉村 摂護

片田 きく

遠山のり子

清水 量子

井手本 恭子

伊東 孝子

酒井みち子

橋本 知笑

ふじの 茜

山口 弘子

松 岡凌